

# 五輪ソフト復活へ大きな一歩

ようやく、スタートラインに立つことができた。12月8日にモナコで行われた国際オリンピック委員会（IOC）の臨時総会で、五輪開催都市が競技、種目の追加を提案することが認められた。2008年の北京大会を最後に五輪実施競技から外れていたソフトボールが、20年東京大会で復活する可能性が出てきたこととなる。関係者にとって、非常に大きな一歩だ。

IOCの決定を受け、私は8日夜、日本ソフトボール協会副会長として、全日本野球協会の鈴木義信副会長とともに合同記者会見に臨んだ。

数多くの報道陣が詰めかけ、会場からは早くも期待の声がかれた。だが、鈴木副会長が「（競技復活の）第一関門を突破しただけに過ぎない」と話したように、まだま

ソフトボール元日本代表監督、NPO法人「ソフトボール・ドリーム」理事長

宇津木 妙子

\* 毎週日曜日掲載



8日夜、IOC臨時総会の結果を受け、全日本野球協会の鈴木義信副会長（右）と記者会見に臨んだ（東京都中央区）＝飯島啓太撮影



だ油断はできないというのが実感だ。私も、「うれしく思っているけれど、これからは本場の勝負だと思っている」と表情を引き締めた。

ただ、これまでの復帰活動を振り返ると、感慨深い思いもこみ上げてくる。

次期五輪、16年リオデジャネイロ大会の競技復帰が絶たれた時は、アフリカのガンビアでソフトボールの普及活動中だった。09年8月13日のことだ。復帰に懸ける思いが強かっただけに本当にショック

で、翌14日の読売新聞運動面には、私の「みんなが意識を高め、一つになるのが遅かった。もちろん復帰をあきらめたわけではないが、このモチベーションを20年五輪まで保てるか。今は考えられない」という、少し弱気なコメントが掲載された。

あのときの落胆、悔しさが忘れられないから、その後も普及活動にまい進できたのだと思う。競技の知名度が低いヨーロッパやアフリカ大陸に何度も足を運び、ソフトボールの魅力、楽しさを伝えて回った。盛んな国と、そうでない国との「温度差」を埋めようと必死になった。全世界の関係者が心を一つにして「五輪に出たいんだ」と強く思わなければ、願いはかなわない。一度除外された競技を五輪に復活させるのは、それだけ難

しいことなのだ。

東京五輪では、空手やスカッシュなども追加種目に名乗りを上げている。いずれも愛好者の多い競技で、五輪種目になるのを心待ちにしている人も多いと思う。すべての競技が五輪種目に入ればこんなにうれしいことはないが、残念ながら種目数には上限が設けられている。スポーツマンらしく、互いの良さを認め合いながら、来年7月の正式決定まで最善を尽くし、最高の結果を待ちたいと思う。

東京五輪での競技復帰とともに、私には、もう一つの悲願がある。国内五輪の開催をきっかけに、ソフトボールの「聖地」となるようなスタジアムを作ることだ。競技に取り組む青少年少女の目標となる、野球における甲子園のような場所――。夢物語に聞こえるかもしれないが、その実現に一步でも近づくために、私はこれからも地道な普及活動を続けていくつもりだ。